

讃岐の出土遺物から

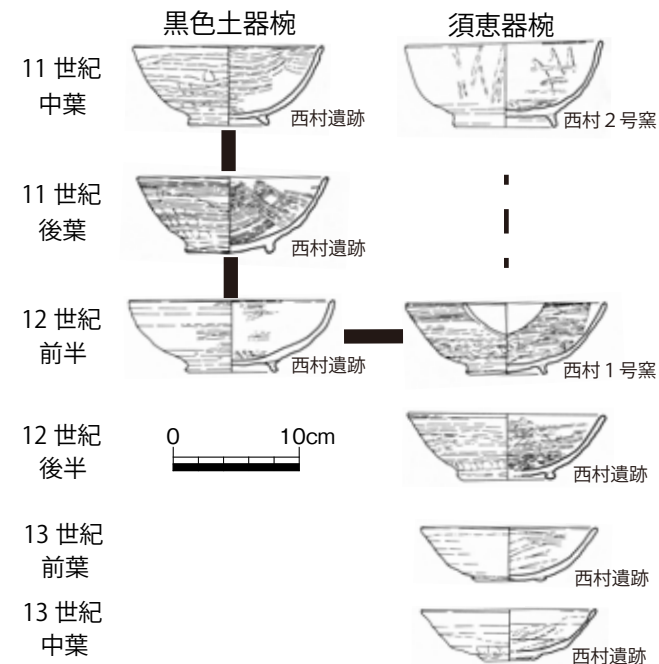
にしむらがたどきわん 西村型土器椀

西村型土器椀は十瓶山窯跡群内の西村遺跡（綾川町陶）で確認された黒色土器椀・須恵器椀のことです。11世紀中葉から13世紀代まで生産され、県内に多く流通したことから、遺跡の年代を探るうえで重要な手がかりとなります。

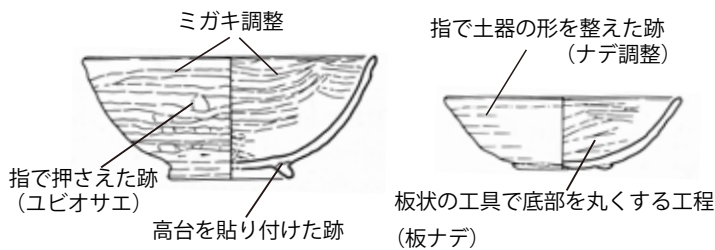
製作工程としては、ロクロで形をつくった後、板状の工具で底部を丸く仕上げ、内面をへらで磨きます。その後、ロクロの回転を用いて外面をへらで磨き、器面の凹凸を整え、ロクロからへらで切り離れた後、高台を貼り付けています。とくにロクロ回転を用いるへら磨きは、十瓶山窯産よりも古い時期の黒色土器椀の技術を受け継いでいます。

当初は黒色土器椀と須恵器椀が存在していましたが、12世紀後半になると、須恵器椀だけになります。同時に、西村遺跡に生産が集約され、煙管状窯という小型の窯で焼成されるようになりました。

西村型土器椀の登場（11世紀中葉）と変化（12世紀後半）は、十瓶山窯跡群の中世的生産地への転換を考えるうえで、欠かせない要素の1つです。とくにその変化は、十瓶山窯跡群が中世的生産地への転換を達成した理由の1つになります。このように、西村型土器椀は、中世讃岐の生産地・消費地を語るうえで、非常に重要な遺物だといえます。



▲西村型土器椀の変化（縮尺=1/6）
（徐々に高台が低くなり、体部が開いて器形が浅くなっていきます）



▲西村型土器椀にみられる主な技法



▲へらミガキ調整（左：内面、右：外面）
13世紀になると、へらミガキ調整は省略されるようになります。



▲窯と掘立柱建物跡（西村遺跡、奥に煙管状窯）
▲粘土採掘坑跡（西村遺跡）



▲煙管状窯の模式図
佐藤竜馬 2000 「讃岐における平安期の土器研究」 『中近世土器の基礎研究 XV』 日本中世土器研究会より転載

※西村遺跡では、12世紀後半以降の窯や粘土採掘坑、建物が集中することから、窯と工人の居住地が一体化していたと考えられます。



▲岡遠田南遺跡で確認された飛鳥時代の掘立柱建物跡群（西から撮影）



◀岡遠田南遺跡での発掘体験の様子

いにしへの

讃岐

香川県埋蔵文化財センター情報誌

NO.113



香川県埋蔵文化財センター

〒762-0024 香川県坂出市府中町字南谷5001-4
tel. 0877-48-2191 fax.0877-48-3249

<https://www.pref.kagawa.lg.jp/maibun/maibun/index.html>

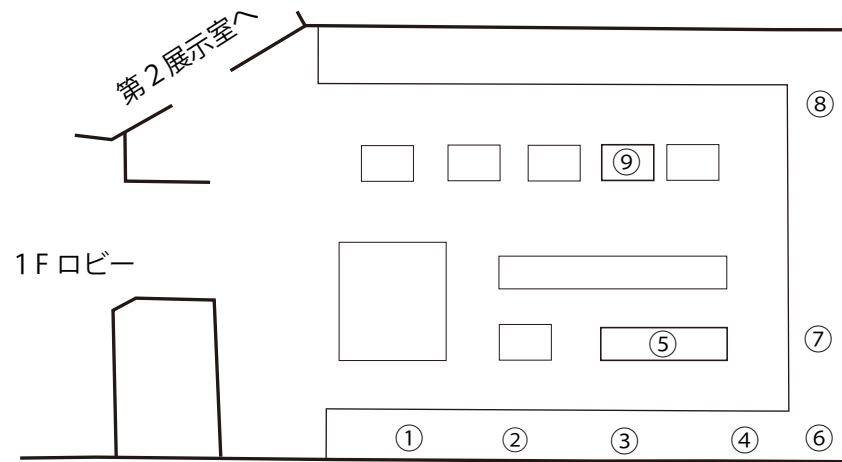


第1展示室の展示替え

香川県埋蔵文化財センターでは、県内の埋蔵文化財の調査・研究ならびに保管・活用を行っており、その一環として、過去の発掘調査で出土した資料を展示し、香川県の歴史を紹介しています。

現在、第1展示室では「遺跡・遺物からみた香川県の歴史」について展示を行っていますが、最新の調査成果を反映するため、昨年度に展示替えを行いました。

今後も第1展示室の展示を随時更新していく予定です。新しくなった第1展示室を是非ご覧になってください。



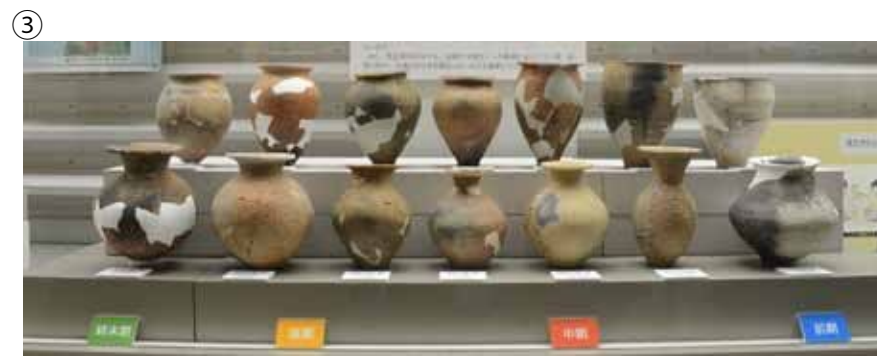
▲サヌカイトを多く産出する香川県は旧石器時代から石器づくりの中心地でした。旧石器の種類や製作技法、旧石器時代の環境などについて紹介しています。

ピックアップ!
同じ石から多くの石器が作られたことが分かります。



▲縄文時代は時期によって遺跡の分布などが変化します。県内で出土した縄文土器などを展示しながら、縄文時代の備讃瀬戸について紹介しています。

ピックアップ!
おしがたもんどき 押型文土器という縄文土器で、県内最古のものです。



▲県内で出土した弥生土器を時系列順に展示しており、形状や文様の変化などを見比べることができます。各時期における弥生土器の特徴をご覧ください。



ピックアップ!
香東川下流域産土器の形を整える技術を分かりやすく観察できます。

◀高松平野北東部の限られた集落で製作され、県内だけでなく、他地域にも流通した「香東川下流域産土器」について紹介しています。



▲弥生時代は本格的な農耕が始まった時代でした。農耕具や加工具として利用された石器・木器を展示し、農耕文化の到来による新たな石器・木器の登場や集落間の交易などについて説明しています。



◀田村遺跡で梵鐘を铸造した土坑の底部を剥ぎ取ったものを展示しています。今回、铸造の過程を説明したパネルを新調しました。



▲弥生時代から古代にかけての備讃瀬戸は塩の一大産地でした。ここでは、塩づくり専用の土器である製塩土器を展示し、土器製塩の工程や備讃瀬戸における土器製塩の展開について紹介しています。



ピックアップ!
とうしつどき 陶質土器という朝鮮半島の焼き物です。渡来人が持ってきたと考えられます。

▲パネルで讃岐の代表的な古墳を紹介しています。また、古墳時代から飛鳥時代にかけての須恵器と土師器を年代順に並べ、土器の変化を示しています。形状の変化や各時期の特徴をご覧ください。



ピックアップ!
海底から引き揚げられた中世の甕。商品として、西国へ運ぼうとしたものです。

▲古代の讃岐は日本有数の窯業地帯でした。ここでは、四国最大の窯業生産地である十瓶山窯跡群で生産された須恵器などを展示し、その生産と展開について紹介しています。